

足下を見る

何時も何か何かと非凡なことを求めて歩いている間に、平凡なことで大切なことを見落してゆく。道に心がけるものは、外に非凡を追わず、常に内に、限を開いて、不断に心掛けて生きてゆく。

後に、家庫まで飲んでしまふような大酒飲みも、生れた時、盃を持って生れたのではない。後に徳一世を風靡するような学者も、イロハを習った時がある。一字一句宛学んだのである。

不断の歩みほど恐ろしいものはない。平凡な不断の歩みほど後になって大きなものはない。

大悪事を為すには、長い時間を要しない。数分間に一生を葬るようなことが出来る。

しかし人の大成は一朝一夕には出来ない。平凡に見ゆる精進が絶対が必要である。年老いて、何ももない人を見る時、その若き日のことを思う。誰も、導いてくれる人はなかったのか、叱ってくれる人はなかったのか。心が朽ちた木のようになる迄に、その麗々しい若い心に教のメスを入れてくれる人はなかったのか。

老いたる心は硬く弱く、すでに何もものをも受けつけない。若人よ。今日何をしている。何を考えている。又しても窓の外を、若い男が「ああそれなのにそれなのに。」と歌って通る。

「一。蓮如上人、幼少なる者には、まづ物を読めと仰せられ候。又その後は、いかに読むとも復せずば詮あるべからざる由仰せられ候。ちと物に心も付き候へば、いかに物をよみ聲をよく読み知りたるとも義理をわきまへてこそと、仰せられ候。その後、いかに文釋を準蔓りとも信がなくなればいたづら事よと仰せられ候。」(御一代聞書)

上人の念の入った御親切ではある。まず物を読め。だが、悪書をどれだけ読んでも何にもならぬばかりか、却って害となる。心すべきである。何が何でも聖典の一冊位は、身の側におきたい。

「いかに読むとも復せずば詮あるべからず」

これは幼少なるものだけではない。復習する。何回でも何回でも復習する。そして、聞いたこと読んだことが、初めは自分よりも、飛びはなれた難しいと思われたことが、常識になるまで復習する。常識になったことだけが、その人の真の力である。常識にまでならないことは、ノートの中にある本の中にある。

賢い人とは、普通の人、そんな難しいことがということ、常識にしてみました人のことである。

「ちと物に心も付き候へば、いかに物をよみ声をよく読みたりとも義理をわきまへてこそと仰せられ候。」

義理をわきまへよ。わけがらがよくわからないと、自分のものにはならない。御経読みのお経知らず。実際にいざと問われたら、普通便つていいる言葉の意味さへ、ほんとうにはわかっているまい。

お経や御聖教の言々句々は、その義理を明らかにすることによって、そのまゝ道をはつきりすることであり、己を明かにすることである。であるから、学ばずして、高僧、聖者となつた方は一人もない。高僧聖者は、経の言々句々が造つたのである。読書して義理をわきまえないのは読まぬにも等しい

「その後はいかに文釋を覚えたりとも、信がなくほいたづら事よと仰せられ候。」
信がないならば、徒事である。いくら文章の訳がわかつても駄目である。信は、積んだ薪につけられた火である。信は流れる命の血液である。信がないということは、死んでいるということである。

学問も出来る、才能もある。理窟も言えば、仕事もする。それにたつた一つ何か足りない。その何か足りないたつた一つ、それが何であるか。云く信である。金剛不壊の信念である。

この足りないたつた一つのが、足りないままでものを言う。信心もものを言へば、無信心、無信念も、ものを言う。

隠しても隠しても、長い間には、腹の中がそのまゝものを言う。

足りないたつた一つ、それを満たさないでおけば、そのかわりを外に求める。求めずにはおかない。そこでその人の歩みにすぐ出て来る。

生きること、結果を得ることに急ぐ前に、たつた一つのを成就することに思い至る者こそは常に常に自分の生活を教えによつて、内省によつてたてかえてゆく。

私は六月の長期講習の準備のため、ある日、大智度論の卷七十三、阿毘跋致品第十五を頂いていた。それは論註の最初に、阿毘跋致、即ち不退転ということが出来るからである。拝読している途中、私は率然として眼を止め、慄然として、襟を正した。それは、

「復次須菩提。菩薩摩訶薩乃至夢中亦不行十不善道。」（復次に須菩提、菩薩摩訶薩は、乃至夢中にも亦十不善道を行ぜず）

との句に眼を奪われたからである。真の菩薩は、覚めている時はもちろん、夢中にすら十不善道を行じないと言われるのである。

「夢ほど真実はない」とある方は言われたそうである。聖人にしてもその他の聖者にしても、みな尊い夢を見ていられる。聖徳太子の夢のお告げ、六角堂の救世観世音の

夢告等。聖徳太子は、夢殿に入つて、ものをお考え遊ばしたとのこと。そうであろう
そうであろう。私のような悪逆は、夢にさへ、尊いことを見たことがない。畢竟、覚
めている時、愚劣なことばかり考えているからである。

しかしこの智度論の一句は、尊い鏡となつて、我を見せて下さつた。これについて
色々と考えることもあるが今は省く。

「一。人はそら言申さじと嗜むを随分とこそ思へ。心に偽あらじと嗜む人はさのみ
多くはなきものなり。又よき事はあらぬまでも、世間佛法共に心にかけて嗜みなき事
なり。」(御一代聞書)

痛い御教訓である。善い事はないまでも、世間につけても、仏法につけても心にか
けて嗜めと言われるが、まずその事からが、どうなつていようか。腹の中が、み光に
よつて清算されていないと、することも為すことも、皆この教を裏切つて、悪事ばか
りを積極的にしているのではないか。

「人はそら言申さじと嗜むを随分とこそ思へ。」

口で嘘を言わない、言葉を謹むということを随分と思うと言われる。その言葉を嗜
むということをごだけ心掛けていようか。言い放してはあまいか。

「心に偽あらじと嗜む人はさのみ多くはなきものなり。」

心に偽あらじと嗜む、心に偽あらじと嗜む人、それはあんまり多くはないとの仰
せ。身にしみて有難いみ教である。

人は如来に召されず、善知識を持たず、み光によつて、偽ることの出来ない手術台
の上に乗らぬ限り、ただ、心をゴマ化して生きる。「人間は、海を山とも答ふべし、
心の問は、如何答へん。」心の問う世界、心の声をゴマ化すことの出来ぬ世界が、宗
教の世界である。招喚のみ声は、この世界において初めて聞えて来る。

お念仏を申しつつ、静かに足もとを見つめて生きさせてもらうべきである。聖人は
懇にお諭し下さつた、『末燈抄』に云く、

「われ往生すべければとて、為まじきことをもし、思うまじきことをもおもひ、言ふ
まじきことをも 言ひなどするはあるべくも候はず、貪欲の煩惱に狂はされて欲も
おこり、瞋恚の煩惱に狂はされて、猜むべくもなき因果をやぶる心もおこり、愚
痴の煩惱にまどはされて思ふまじきことなどもおこるにてこそ候へ、めでたき佛の
御誓のあればとてわざと為まじき事共をもし、思うまじき事どもを思ひなんどせ
んは、よくよくこの世の厭はしからず、身の悪き事をも思ひ知らぬにて候へば、念
佛に志もなく、仏の御誓にも志の在しまさぬにて候へば、念仏せさせたまうとも、
その御志にては順次の往生も難くや候ふべからん。」

誠にみ教頂くべきである。蓮如上人教えて云く、

「一。行きき向ばかり見て足下を見ねば履みかぶるべきなり。人の上ばかり見てわが
身の上のこと嗜まずば一大事たるべきと仰せられ候。」と。

花の咲いたような気になつた時、油断すると後の悔の種を播いている。